

お米が教えてくれたこと

宮城県立古川黎明中学校 2年 三 上 唯

「はあ。」朝ごはんを食べる為にいすに座った私はいつもどおり心の中でため息をついた。目の前には山盛りの白米。これを朝から食べなきゃいけないと思うだけで憂うつになる。日本人ならお米が好き、という言葉はよく聞くが私はお米が好きではない。でも、私の叔母の家が農家で買わなくても沢山お米が届くのでお米を毎日食べなくてはいけない。この時の私はお米の大切さを考えようともしていなかった。

ある時、

「米という漢字を分解すると八十八になるんだよ。お米をつくる時に八十八回手間をかけて作るから、そう言われてるんだよ。」と叔母が教えてくれた。私も田植えを学校で経験したが、それは本当に一部だということに気が付いた。では、具体的には何をやっているのだろう。私は米作りについて何も知らないということにこの時気が付いた。叔母に質問してみると、まず種まきから始まって、田植えをする前に植える苗を育てて、堆肥振りをして、肥料振りをして、田んぼを耕して、代かきをして、田植えの準備をすると教えてくれた。私はとても驚いた。なぜなら私が経験した田植えこそが米づくりのスタートだと思っていたからだ。だが実際は私が思っていたよりもずっとずっと前から米づくりはスタートしていたのだ。私はこの話を聞いて米づくりに興味を持った。

「あと、草刈りもしないとね。」

という叔母の言葉を聞いて、ああそうだった。満足していたがまだスタートをしただけばかりだということ思い出して、本当に米づくりは大変なのだと知った。叔母はこんなに大変なことをやっていたらつくはないのかそんな疑問が頭をよぎった。

家でも私の米づくり調査は続いた。様々な農家さんのインタビュー記事を読んだ。その中に、仕事がつらいと思う時はあります。と質問に答えていた農家さんの記事を見つけた。その農家さんは稲はわが子のような、自分がいっしょうけんめいに育てたお米を「おいしい」「また食べたい。」と食べてくれた人が言ってくれることが一番うれしいとも話していた。叔母の顔が思い浮かんだ。暑い中今日も田んぼに行って稲の様子を見たり、草刈りをしたりしているのだろうかと思った。そんなお米をどんな気持ちで私の元に届けてくれているのだろうか。そう考えると私はなんてわがままでひどい事をしていたのだろうと後悔した。温かいお米が出てくることがあたり前になっていて、私は大切なことに何一つ気が付いていなかった。

その日の夜、いつもは母がしている米とぎを私がすると言った。少しずつでも行動をおこさねばと思ったからだ。ジャジャジャ、米をとぐ音を聞きながら一粒もむだにしてはいけないと強く心にちかかった。翌朝、私は笑顔でいすに座った。私はかわったのだ。あたり前なんかじゃない、この白米の一粒一粒が叔母の汗で努力なんだと気付いたから。「いただきます。」そう言って口に入れたお米は、やさしい味がした。

お米以外の事でも最近の人はあたり前だと思っていることが多いのではないだろうか。普通に食べて、普通に暮らして、それでも私にはあれが足りない、これが足りないと思うことはないだろうか。私達はないものについてはよく考えるがあるものについてはあまり考えないのだろうと私は思う。だからこそ、あるものを考えてほしい。あたり前なんて言葉がないことに気付いてほしい。その水もお米も服も住む場所もない人は沢山いるのだから。

私は、あたり前なんてないと気付いてから、感謝の心や幸せを再確認することができた。

「ありがとう。」今日も私はお米を食べる満面の笑顔で。